

引き算の文学

福田浩尚

日本独自の文学に、和歌や俳句がある。これ等を称して「引き算の文学」と言った国文学者がいた。詩は文学の重要なジャンルでどの国にもある。この詩から、言葉を引いて引いて出来るだけ短い表現形式にしたものが和歌であり俳句である。おそらく、これだけ文を短くして事象や心象を表現するということは海外には例をみない日本だけのものではなからうか。

日本の詩歌の始まりは、他の文物と同様に中国から伝来したもののだろう。詩歌は文字を必要とする。はじめは、万葉集にあるように漢字をあてて音を表現した。しかし、日本語と中国語はまるで、水と油のように、発音も構成もちがう。漢字は輸入したが言語は輸入できない。漢詩は日本でも、中国の様式をそのまま取り入れた。漢詩には、律詩とか絶句とか韻をふむとか厳しい決まりがありこれを守らなければならない。それが現代でも守られている。

言葉が違う日本人にとってもっと自由な詩の形式が求められた。日本人が、情景や人間の心の感動を表現するものとして和歌が生まれ、万葉集で集大成された。この和歌文学の特徴は自然の情景や人間の生活感情をできるだけ、簡潔にしかもその詠おうとする対象にできるだけ近づけるということであった。できるだけ、歌いやすく（詠唱しやすく）心に響き、しかもできるだけ短くということ「引き算」の精神が生まれた。しかし、そこにはなんらかの決まった形式がなければ美しくならない。三十一文字で表現する種類の形式となったゆえんを考える。この形式が更に俳句となって十七文字でしかも季語を挿入するという文学に発展した。

和歌、俳句は引き算の文学であると言った。引くことを重ねた結果、歌いやすく、かつわかりやすく、かつ内容が深く多くの意味を含むということが重要なこととなりせんじつめれば、これ等

を上手に満たしたものが秀作ということになる。

石川啄木の歌からひとつとりあげよう。

函館の青柳町こそ恋しけれ 友の恋歌 矢車の花

私の最も好きな歌のひとつであるが、これを例にして、情景・心象を想像してみよう。いまは、引き算の反対、足し算の作業としてたどってみる。まず、冒頭の函館であるが、北は北海道、冷涼な気温で爽やか、しかもなにか懐かしい感じがする。のちには流行歌にもうたわれてロマンチックな気にもなる。その青柳町である。青柳町はどういうところかよく知らないが名前からして、青々とした柳がある町であろうからやはりみずみずしい新鮮さをおぼえる。作者はその、青柳町の長屋（あるいは小さな木造の二階か？）かなにかの一角に住んでいるのであろう。おそらく友達と共に同宿している。友達も啄木もまだ若い。あるいは、その友達は歌詠みの仲間かもしれない。その友達が歌を口ずさんでいる。恋の歌なのである。初恋かもしれない、そして、宿の庭先には矢車草が咲いている。矢車草は春から初夏にかけての花である。花も友達も、そしてその恋もまだ若若しく新鮮さを覚える……。そんなことがあったあのころ、あの場所がなつかしいなあと往時を偲んでいる歌である。たった三十一文字のなかにこれだけのものが凝縮されている。ちなみに矢車草の花ことばは幸福感なそうだ。啄木の短い生涯、二十六年間の人生のなかでこの函館での生活が少ない幸福な時期だったかもしれない。

余談であるが、啄木の歌集には誤植が多いことで有名だったというエピソードがある。活字を拾う植字工が歌の哀しさに涙で眼がくもりがちになり誤ってしまうからなそうである。

次に、更に引き算が進んだ俳句をとりあげよう。

松尾芭蕉、

象潟や 雨に西施の合歡（ねぶ）の花

また、地名を読み込んだものを取り上げた。象潟は秋田県の南にあり松島と同じような小島が多く浮かんだ風光明媚なところ……。現在はその面影が無いと言う）私には何となく朝がたの雰囲気を感じる。芭蕉は旅の身にありこの有名な美し

い海岸を鑑賞しようと考えたのではないか。ところが期待にそわず雨が降っていた。ふと見ると合歓の花が咲いていて、降る小雨に風情のある花を咲かせている。西施は有名な中国の美人、国や城をかけてまで得たいと願うほど美しいというのだからどんな人だったろうと想像してしまう。その眉は、のちに「顰にならう」という故事が生まれたほどの整った美しい眉だったらしい。ねむの花はご存知の通り、眉のような形状をしたピンク色のはなびらを持つている。花がまるで西施を思わせると言っているのである。また、合歓の花の字からなにか色っぽいものを感じる。旅先的情景と歴史上の事象が見事に織り込まれている。

古池やかわずとびこむ水の音

は余りにも有名な句である。この句については、秀作と同時に駄作という評価がある。芭蕉が古池の静寂さを破る蛙に、新たな俳句の境地を展開する心意気を詠んだなどと言われたりしているが私にはあんまりぴんとこない。引き算の結果こうなったのである。ろうが足し算をして元がなんであつたかを復元するのが私の知識と想像力ではかなり困難だからである。十七文字という制約された条件に合わせるためには致し方がないことだろうが、どうも私には引き算のし過ぎのような気がしてならない。同じ芭蕉の句でも、

夏草や強者どもの夢のあと とか、

加賀の千代女の

朝顔につるべとられてもらひ水

のような傾向の句のほうが好きだ。読み手の対象についての感情移入がよく伝わるからである。それにしても、海外でも俳句がさかんに行われだしているというがこれには驚く。日本語独特な表現形式でかなりの制約があるうが、心象風景をできるだけ簡潔に引き算をして表現することに魅力があるのだろうかと思う。

終わり

2012年7月・12月修整